

『今月の天候と農作業』

通巻第5612号
2月号
平成30年2月1日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低い時期もあるでしょう。

【予報のポイント】

寒気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は低いでしょう。特に、期間の前半は気温の低い状態が続き、かなり低くなる時期もあるでしょう。冬型の気圧配置となりやすく、前線や低気圧の影響を受けにくいいため降水量は平年並か少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率80%です。2週目は、低い確率60%です。

<1 週目の予報> 2月3日(土)～2月9日(金)

冬型の気圧配置が続くため、東シナ海側では雲が広がりやすく、期間前半は雪や雨が降るでしょう。太平洋側では晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 2月10日(土)～2月16日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 2月17日(土)～3月2日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 播種と出芽

十分に浸種した後に催芽を行い、芽出した種子を用います。稚苗の場合は催芽糶で180g程度を播種し、苗立枯病等の防除も兼ねてかん水します。覆土は糶が隠れる程度とし、厚播きは徒長苗になりやすいので注意します。

段積みでの出芽は地面と箱の間に隙間を作り、積重ねは十段程度とします。平置きの場合温度が上がりにくいので加温します。温度は28～30℃で出芽長は床土面から5～10mmで終わります。高温や期間が長くなるとリゾープス菌（クモノスカビ）が発生します。

2 緑化と硬化

緑化は寒冷紗等で3日程度遮光し、温度は昼間は25℃以下、夜間は15℃以上を保ちます。本葉1葉目が展開し、2葉目が抽出する頃までに行い、この時の苗の第一葉鞘高（腰高）は4cm以内とします。

硬化の前半は、昼間が20℃以下、夜間は10℃以上を保ち、後半は外気に慣らします。かん水は床土温度を下げないように午前中に行います。

なお、中苗や成苗は播種後20日目と30日目頃に液肥を散布し、散布後は軽くかん水して葉焼けを防ぎます。

◆麦類

1 穂肥

早いところは月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2.5kg、加里で2kg程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるので、麦が節間伸長期に入る前までに行います。排水対策は、ほ場周囲や条間に作溝します。

（荒砂 英人）

施設野菜

◆共通事項

中旬までは午前中の温度確保と内張カーテンの開放により光線を確保し、光合成を促進します。下旬には日射量も増え、最低気温も徐々に高まるため、加温機の稼働時間が短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなります。夜温の高い日は内張カーテンの調節

により適度に加温機が稼働するようにします。

また、収穫までの日数が短くなり、着果量も増えてくるので、追肥とかん水量を増やしますが、かん水間隔を短くするなど、極端に栽培環境を変えないよう、こまめな管理に心掛けましょう。

◆きゅうり

ハウス内の温度管理は午前中28～30℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成のつる下ろし栽培は、芯止まりになりやすいので、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節前後で収穫できるのが理想）に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともに、かん水量を増やし、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。ハウス内の温度は、午前中28℃、午後は徐々に温度を下げ夕方25℃、夜間は18℃とします。

◆トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要です。日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。下旬以降は着色までの日数も徐々に短くなり、着果数も増えてくるため、かん水量を増やし、草勢維持に努めます。

◆いちご

曇天が続くと、成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。ハウス内の温度は、午前中は25～28℃、午後は20～25℃、夜間は5～8℃とします。

曇天が続き、日中温度が上がらない場合には着色促進のため、夜温をやや高め（8℃上限）に管理します。また、大玉果と食味向上のために8～10果に摘果します。

ハダニ類が多発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

（黒木 正晶）

葉茎菜類及びいも類

◆トンネル内の温度管理

気温が低い時期なので、トンネル栽培では温度確保に努めます。晴天日の日中は高温になる日があり換気の必要な場合があります。レタス、スイートコーン、かんしょ、ニンジン等トンネル栽培については開閉管理を徹底し、適温管理に努めましょう。

◆畦立てマルチ

これから播種・植付けする品目の発芽・活着促進は地温と土壤水分を確保することが大切です。マルチングする時はほ場の土を片手で握り団子になる程度を目安とします。逆に手が濡れるような場合は過剰ですので適湿になるのを待って耕起します。

◆食用かんしょ

来月にかけて、トンネル栽培の挿苗時期となります。採苗10日前頃から育苗ハウス内の苗は外気温に慣らしながら管理し、徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。また、挿苗後の発根を促進させるため、挿苗予定の数日前に採苗し、適湿・適温を保ちながら保管します。これを「取り置き苗」と言います。定植予定のほ場は、挿苗時の十分な地温確保が必要なため、トンネルは前日から密閉して地温確保（18℃以上）に努めます。地温が低く、徒長苗の利用など条件が悪いほど活着が遅れ、株当たりのいも数も減りやすいので注意してください。

◆さといも

早生品種の定植期です。連作障害が出やすいため連作は避け、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。種いもは、病害虫のあるもの、芽つぶれのあるものはしっかり除き、健全なものを大きさ順（30～50g程度）に揃え、種いもの表面に付着している土をしっかりと洗浄した上で、薬剤によるセンチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

なお、去年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底によると思われる事例がありました。定植予定ほ場の周辺に前年から、ほ場保存中のさといもがある場合は、早めに片付けます。残さの分解にはトラクター速度を遅く、ロータリー回転を速くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

（杉村 幸代）

果 樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。これからは暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されるので、ハウス内の温度管理に注意しましょう。昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意しましょう。完熟果実は打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、果実の過度の積み重ねを避けるなど、丁寧に扱きましょう。

◆マンゴー

開花期に湿度が高いと、花穂の軸腐病や灰色カビ病が発生し、その後の果実品質が低下します。換気や夜間の十分な加温により、湿度を低く保ちましょう。

マンゴーの果実は大玉で鮮やかな赤色の割合が多いほど高品質の果実とされ、高単価で取引されます。

このため重要となるのが、早期摘果と幼果期からの日照確保です。摘果時は、極端な早期摘果を避け、果実の縦径が3 cm程度になったのを確認してから行いましょう。その後は果実を吊り上げて、光が十分に当たるようにしましょう。果実が5 cm程度になったら、結果枝2～3本当たり1果に結果数を調整しましょう。

また、開花直後のアザミウマ類の発生は果実品質を大きく低下させます。発生に注意し、ミツバチを出した後は、すぐに防除を実施しましょう。毎年カイガラムシの発生が見られる園では発生に注意し、早めに防除を行いましょう。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

果樹栽培において高品質・高収量を得るためには、土壌の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行いましょう。

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害し、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

2～3月出荷作型は最も暖房コストがかかる作型です。それぞれの品種、系統に適した変温管理でコスト削減に努めてください。施設が多層被覆によりハウス内の湿度が高まる時間帯が長くなります。換気除湿や循環扇の活用、定期的な予防散布などを行ってください。除湿機能を持つ被覆資材の導入も効果的です。

神馬66-4の3～4月出荷作型の再電照開始は総苞りん片形成後期から3～4日間実施します。開始時期の決定は、必ず花芽分化の検鏡調査を行った上で決定してください。

◆スイートピー

2月は天候が不安定です。天候をチェックし、細やかな環境管理を行ってください。また、植物を良く観察し、草勢に応じたかん水及び施肥管理を適切に行ってください。花シミも発生しやすい条件になるため、換気に努め、循環扇などでハウス内の空気を動かし、結露を防ぐなど花シミの軽減を図ってください。また、定期的な生物農薬のダクト散布は灰色かび病対策に有効です。

◆ホオズキ

7月出荷は、2月上旬までの植え付け、8月出荷は、2月中旬からの植え付けになります。土壌消毒を必ず実施し、ネコブセンチュウや白絹病などをほ場に持ち込まないように、十分に注意して地下茎の選別・調整を行い、必要に応じて地下茎を消毒してください。

◆デルフィニウム

沿海地域では二番花の収穫期から三番花の萌芽期です。ボリュームを確保するために適切な仕立て本数に整枝してください。また、下旬頃からうどんこ病の発生が増えやすくなるため、発生前からの定期的な予防散布を行います。

◆トルコギキョウ

特に、八重系のブラスチングや成長点の障害が心配されます。適切な温度管理に加え、不要枝、蕾の摘除、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図ってください。灰色かび病による花シミや花粉へのカビ発生対策には生物農薬のダクト散布が有効です。

◆ラナンキュラス

1月後半から収穫量が増加していますので、草勢が低下しないように濃度150ppm程度の液肥を定期的に施用してください。日中の温度管理は収量確保のため15℃程度を目安にします。

(中村 広)

畜産

◆家畜防疫対策

今月は「家畜防疫強化月間」です。国内において、1月に肉用鶏で高病原性鳥インフルエンザが発生し、野鳥からも高病原性鳥インフルエンザウイルスが検出されています。また、韓国では、あひるで高病原性鳥インフルエンザが発生しており、引き続き、養鶏農場へのウイルスの侵入リスクは高い状況です。

農場にウイルスを侵入させないために不必要に人を管理区域に立ち入らせず、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策を徹底しましょう。具体的には鶏舎内や農場周囲の石灰消毒と防鳥ネットの再点検を早急に行い、野鳥はもちろんのこと、ネズミなどの小動物が鶏舎内に侵入しないよう対策を徹底しましょう。散布した石灰は雨が降ると洗い流され、効果が低下するので、持続的な石灰散布を心掛けましょう。

◆家畜の飼養管理

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。哺乳子牛などの幼畜は寒さに弱いため、すきま風が子牛に当たらないようコンパネやシートなどで防止するとともに、赤外線ヒーターなどの保温器具を使用しましょう。また、子牛のお腹が冷えると免疫の低下につながるため、牛床は常にきれいで乾いた状態にし、敷料を厚めに敷きましょう。冬場は、牛舎内の温度維持のためにカーテンなどで牛舎を閉め切るため、換気不足になりがちです。換気不足により牛舎内にアンモニアガスなどが溜まると、家畜の生産性が急激に落ちる原因にもなりますので、気温の上がる日中に畜舎カーテンを開けるなど、こまめな換気を行いましょ。乾燥しすぎると、舞い上がった埃や塵を家畜が吸い込み、呼吸器疾患を発症しやすくなるので、極細かな霧を噴霧するなど適度な湿度を保つようにしましょう。

(大山 佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 春肥の施用

春肥は一番茶を始め、二・三番茶の収量・品質向上に重要な肥料で、二月上旬頃から施用します。二～三回に分けて施用すると、より効果が高まります。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、畝間全面に幅広く散布します。施肥後は根を傷めない程度に軽く攪拌します。樹勢の低下が認められるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果的です。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では二月中旬から、山間地では三月上旬～中旬頃に実施しますが、一番茶摘採期の集中を避けるため、品種の早晚性や地域の微気象等を考慮し、整枝時期を調整します。その際は、整枝直後に急激な低温に当てないように天気予報に注意しましょう。

整枝の高さは葉層を8cm以上確保した上で、最終摘採位置から3～5cm高い位置としますが、秋整枝を実施した茶園では一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝します。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要です。それまでに防霜ファンやスプリンクラーの整備・点検を済ませましょう。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は産卵を開始する気温10℃となる二月下旬～三月上旬頃で春整枝後です。

地区の曆に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。散布前に裾刈りを行うと、より防除効果が高まります

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は時期が遅れると害菌の付着が多くなるので、遅くとも3月中旬までには終わらせましょう。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進する作業です。菌糸の活着に必要な温度と湿度を保つ必要があります。本県では地際から40cm以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないように被覆し、保温・保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めましょう。特に、ほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取しましょう。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵しましょう。

(永野 学)

◆たばこ

今月は子床管理と施肥畦立が主な作業となります。苗の良否が本畑以降の生育に大きく影響するため、育成に努めましょう。

1 床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫が発生しない、良質な肥土を使用しましょう。仮植は葉数5枚苗（米粒大までの葉数）の、根張りの良い苗を仮植しましょう。活着までは床面が乾かない程度にかん水を行い、活着後は夕方床面が少し乾く程度に灌水をやや控えめにし、病害発生や根腐れ防止を図りましょう。また、苗床が高温多湿にならないよう温湿度調整を行いましょ。本畑移植10日前ぐらいからは、苗の根張を促進するために、換気とかん水制限をして順化処理を行いましょ。

2 畦立は、ねり畦防止のため土壤水分に注意して行いましょ。また、根張り促進のための地積確保と排水対策も含めて30cm以上の高畦にしましょ。被覆は早作早進のため、透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等、必要に応じてシルバーマルチ等を活用しましょ。

3 春消毒や苗床での農薬使用は使用基準に準じ、最善の注意を払って行いましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前・事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜類	病害全般	—	多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底します。特にコスト低減のため多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病	やや少 やや少 並 少	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年・前 々年より 少ない 少	黄化えそ病の発生が見られます。圃場内を注意して観察し感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最低でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、改植時には粒剤等による防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	少 やや少	斑点病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハアザミウマ タバココナジラミ	やや少 多 並	今後、暖くなるにつれて増加し、多発してからの防除は困難です。発生初期から防除を行い、発生の多いところでは最低でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病※ 疫病	やや多 並 やや多 並	いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風機を稼働させるなど除湿に努めます。 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます。
	タバココナジラミ トマト黄化葉巻 病 (TYLVCV)	並 並	ウイルスを媒介するタバココナジラミの発生は平年並の状況ですが、施設内には黄色粘着トラップ等を設置し、媒介虫の早期発見・防除を徹底します。また、発病株は根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	やや少 並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする等発生初期の防除を徹底します。 炭疽病を確認した時には、直ちに根ごと抜き取り適切に処理します。
	ハダニ類 オンシツコナジラミ	並 やや少	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 オンシツコナジラミについても、薬剤感受性の低い個体群が確認されていますので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
1) ※は注意報を公表しています。 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、 http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			